

EU の語学教育 「ヨーロッパ言語年 2001」

法学部
平尾 節子

2000年3月、ベルギー・ブリッセルで開催された SIETAR (Society of Intercultural Education, Training, and Research) 学会世界大会において、Intercultural Communication in English Education as a Foreign Language というテーマで研究発表を行った。学术交流を通して異文化間コミュニケーションを体験する貴重な学会であった。ブリッセル滞在中、ヨーロッパ連合 (EU) 本部、Council of Europe, 「教育・文化局」、ベルギー教育省などを訪問し、EU の言語教育に関する調査研究、資料収集、ディスカッションの機会を得た。EU はミレニアムの重要な教育政策として、“The New EU Education and Youth Programmes” を発表し、2001年を“ The European Year of Languages 2001” : 「ヨーロッパ言語年 2001」と定めている。

そのキーワードは四つ、(1)国境を越えて留学・交流する Mobility の促進、(2) “English plus” と称せられる複数言語運用能力の育成と多文化理解、(3) IT、情報通信技術(4)遠隔教育と生涯学習推進である。

そもそも、EU 統合の目的は、平和と繁栄であり、多民族・多文化・多言語の共生と発展である。1952年、ECSC (欧州石炭鉄鋼共同体) が、第一次、第二次世界大戦への反省に立って結成された。ヨーロッパの平和を維持するために、戦争に不可欠な石炭と鉄鋼の生産を共同管理する共同体を発足させたのである。1970年代には EC : European Community (欧州共同体) へと発展し、1991年には、マーストリヒト条約が締結されて、統合の「拡大と深化」を視野に入れたヨーロッパ連合

(EU : European Union) へと発展した。

EU 加盟国は、現在15カ国であり、EU の公用語は、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、スウェーデン語の11カ国語である。

EU の言語教育政策の理念は、「言語の多様性はヨーロッパの文化遺産である。すべての言語が平等である。母語および EU の言語教育の推進は政治的・経済的な成功をもたらす、多様な言語の人々との交流、異文化理解を促進し、偏見・レイシズムを根絶するのに役立つ」とある。

「ヨーロッパ言語年2001」の目的は、「1 + 2」である。すなわち、母国語を完全に習得し、プラス他の言語を2カ国語習得することである。

「ソクラテス」(Socrates) : 総合的教育計画、「リంగా」(Lingua) : 外国語教育計画に基づいて、小学校から、「1 + 2」の複数言語の早期学習が推進されている。

「エラスムス」(Erasmus) 計画は、高等教育部門・



アムステルダム大学にて

大学生および研究者の交流推進計画であり、単位互換制、授業料免除のシステムのもと、マルチ・リンガルのヨーロッパ市民の育成を目指して実践されている。ちなみに、エラスムスはオランダの生んだルネサンス期最大の思想家である。ヨーロッパ各地を広く歴訪して学問を修め、思索を深め、封建社会の下で理性に基づく自由な精神文化

の確立に大きな足跡を残した。ヨーロッパ各地の文化人と交流し、その思想を開花させたエラスムスの名にちなんで命名された「エラスムス」計画は、彼の偉業にならって、ヨーロッパ各地の大学など高等教育研究機関が自由に交流する「ヨーロッパ学生交流計画」が、その中心的活動である。したがって、「エラスムス」の正式名は The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students である。

2001年3月、オランダ・アムステルダムの小・中・高・大学、計8校を訪れた。最初の訪問は、Nicolas 小学校の5年生のクラス。All in English の授業であった。子どもたちは、洋の東西を問わず、かわいい。23名全員が、明るく活発に、英語コミュニケーション活動を展開していた。オランダの公用語は、オランダ語(90%)フリーズランド語(10%)で、学校教育の使用言語は、オランダ語である。英語は、公用語ではない。しかし、オランダの生徒・学生は、学校生活で英語を話し、能力も高い。言語政策として、英語の開始年齢は、小学校の最終2学年、すなわち、10歳から外国語としての英語が必修科目となっている。

Berlagelyceum 中学校1年生のクラスでは、英語でプレゼンテーションをしていた。積極的に、クラスの前へ出て、一人、または、ペア・ワークで声高らかに、発表する姿が微笑ましく感動的であった。中学校では、英語ともう1か国語が、必修科目。1年間の学習時間は、オランダ語160時間、英語133時間、フランス語またはドイツ語53時間。授業と宿題で1年間に、1,600時間。宿題が、各地域により義務付けられている。外国語教育の教育目標として、学習スキルの指導、実践的なコミュニケーションの指導に重点がおかれている。

外国語教育の成果は、小・中・高・大学において、各々到達目標の設定がなされ、卒業年度における到達度テストによって、その成果が示される。また、IEA(国際教育到達度評価学会)による国際比較の評価調査・報告が行われている。

アムステルダム大学では、学生たちは、各自のホームページを作成しており、その Website に

European Language Portfolio (ELP) が導入されている。このポートフォリオは、「ヨーロッパ言語年 2001」に示されている語学学習の水準に向けての自己評価記録である。Language Passport(学生の語学パスポート)、List of Examinations(語学学習の到達度テストなど)、Language Biography(言語学習歴)の3部からなっている。TOEFLなどの外国語検定資格や、交換留学プログラムへの参加、文通経験、外国語話者の訪問受け入れ体験、異文化交流体験などが記載されている。例えば、“My Language Skills”, “What I can do”, “I can read a menu.” など、具体的である。学生個人情報をどこまで公開できるのか、質問したところ、「外部に向けて発信できることが自分を見直すきっかけになる」、「インターネット上のホームページでオープンにすることで、地域社会の人々とも相互意見交換ができるのが役立つ」と語っていた。情報化時代の開かれた自己評価、自己PRの実態に接し、感動を禁じえなかった。

最後に、「ヨーロッパ言語年2001」の合言葉を紹介しよう。

“Learning languages opens doors, and everybody can do it!”

倫敦地下鉄広告

経営学部
安藤 聡

ロンドンの地下鉄は楽しい。などと言うと、車内は狭く汚いし冷房もないし運賃は高いし電車は時間通りに来ないし突然何の前触れもなく駅が閉鎖されるし長いエスカレーターはよく止まるので歩いて上り下りすることを余儀なくされるし縦んば動いていたとしてもエスカレーターのステップ